

千葉県伝統文化伝承事業実行委員会

茂名の歳時記

里芋祭り



目 次

第1章 集落の概要	2
第2章 村のしくみ	5
第3章 生業暦	11
第4章 年中行事	16
第5章 茂名の里芋祭について	23
第6章 里芋に関する儀礼について	28
「茂名の歳時記～里芋祭り～」撮影の記録	32

凡 例

- 1 本書は、DVD「茂名の歳時記～里芋祭り～」の解説書である。重要無形民俗文化財「茂名の里芋祭」と、それに関わる千葉県館山市茂名地区の歳時記を後世に伝承し、その理解を助けることを目的に作成した。平成16・17年度に調査収集した資料をもとに、客観的に記述することに努めている。
- 2 このDVDおよび解説書は、文化庁の平成17年度ふるさと文化再興事業「地域伝統文化伝承事業」の委嘱を受け、千葉県伝統文化伝承事業実行委員会（事務局：館山市教育委員会生涯学習課内）が作成した。なお、DVD映像については、平成16年度同事業により茂名の里芋祭り映像記録作成委員会（事務局同上）が作成した映像記録（「茂名の里芋祭り」）を一部活用している。
- 3 本書は、千葉県伝統文化伝承事業実行委員会内に設置した「茂名の里芋祭り映像記録作成委員会」の委員等が分担して執筆した。全体の編集は、杉江敬（館山市教育委員会生涯学習課文化係長）が行った。
第1・5章 山本志乃(旅の文化研究所研究員) 第2・3章 田村勇(館山市文化財審議会委員) 第4章 榎美香(千葉県教育庁教育振興部文化財課文化財主事) 第6章 小島孝夫(成城大学助教授)
- 4 使用した地形図は、国土地理院発行 1/25,000 地形図「館山」(N1-54-26-3-3)である。
- 5 調査の実施にあたっては、石井武蔵氏(十二所神社氏子総代)・石井初雄氏(茂名区長)をはじめとする茂名区の皆さん、千葉県教育庁教育振興部文化財課、館山市建設部都市計画課、岡田晃司(館山市立博物館)の諸氏、諸機関に、御協力・御助言を賜った。ここに深く謝意を表す。

第1章 集落の概要

1. 位置と地勢

館山市茂名は、房総半島南端に近い平砂浦海岸から3 kmほど入ったところにある谷津田集落の1つです。江戸時代には安房郡茂名村といい、明治22年(1889)に神戸村の一部となったのち、昭和29年(1954)の町村合併で館山市に編入されました。平成18年(2006)現在の戸数は36戸ですが、昭和40年代以降に別荘地開発などによって転入した新戸を除く約30戸という戸数は、江戸時代からほぼ変化していません。現在27戸が、区内にある十二所神社の氏子でもあり、神社の祭礼をはじめとする区のさまざまな行事を支える母体となっています。



第1図 茂名の位置(口)

茂名の周辺一帯は神戸地区といい、近隣には延喜式内社である安房神社や洲宮^{すのみや}神社があるなど、古い歴史をもつ地域です。周辺の村はいずれも境界線が平砂浦海岸までまっすぐに延びていますが、茂名は南側にある布沼と洲宮の両村にふさがれた形になっていて、海を持たない内陸部の村であるのが特徴です。古老の話では、子どもの頃、他村の子どもたちから「茂名のでどなし(出所なし)、アンゴ(カエル)のんで育った」とからかわれたと言いますが、こうした地理的な特徴をよく表わすはやし言葉だといえます。

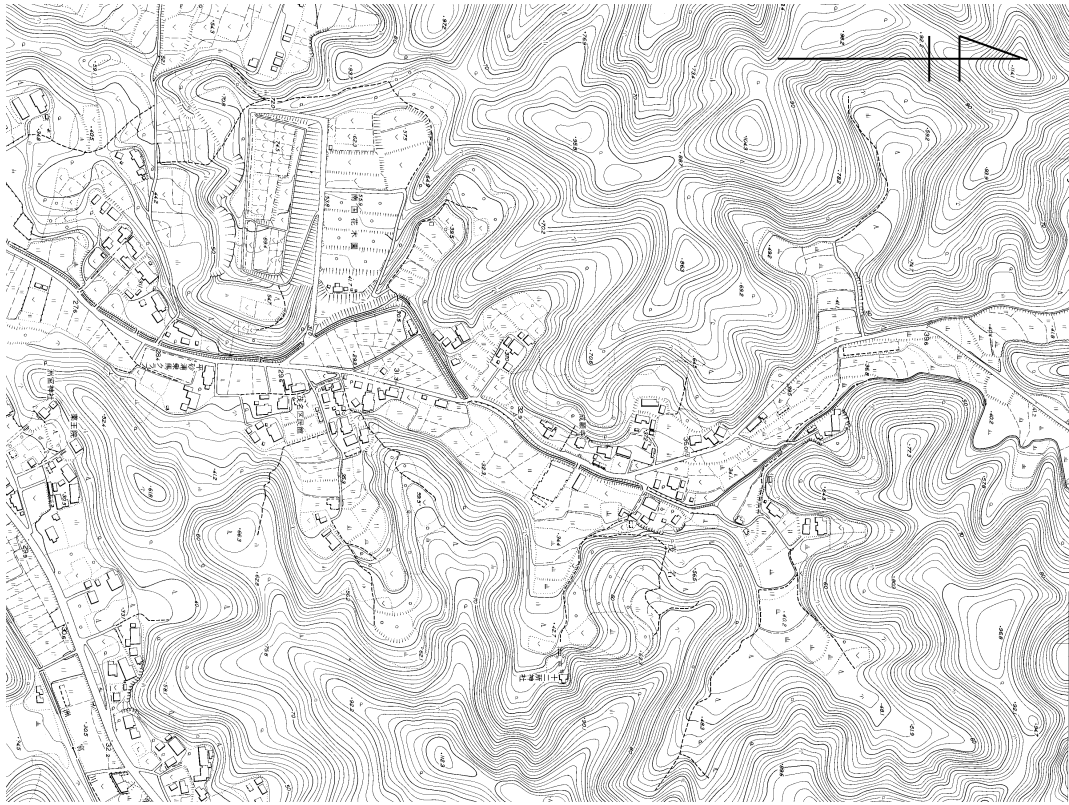
茂名から館山の市街に向けて、山越えの古道があります。要害道、あるいはトトカイミ



写真1 茂名の集落景観



写真2 十二所神社



第 2 図 茂名の地形図（おおよその方位を，写真 3：茂名村絵図にあわせた）

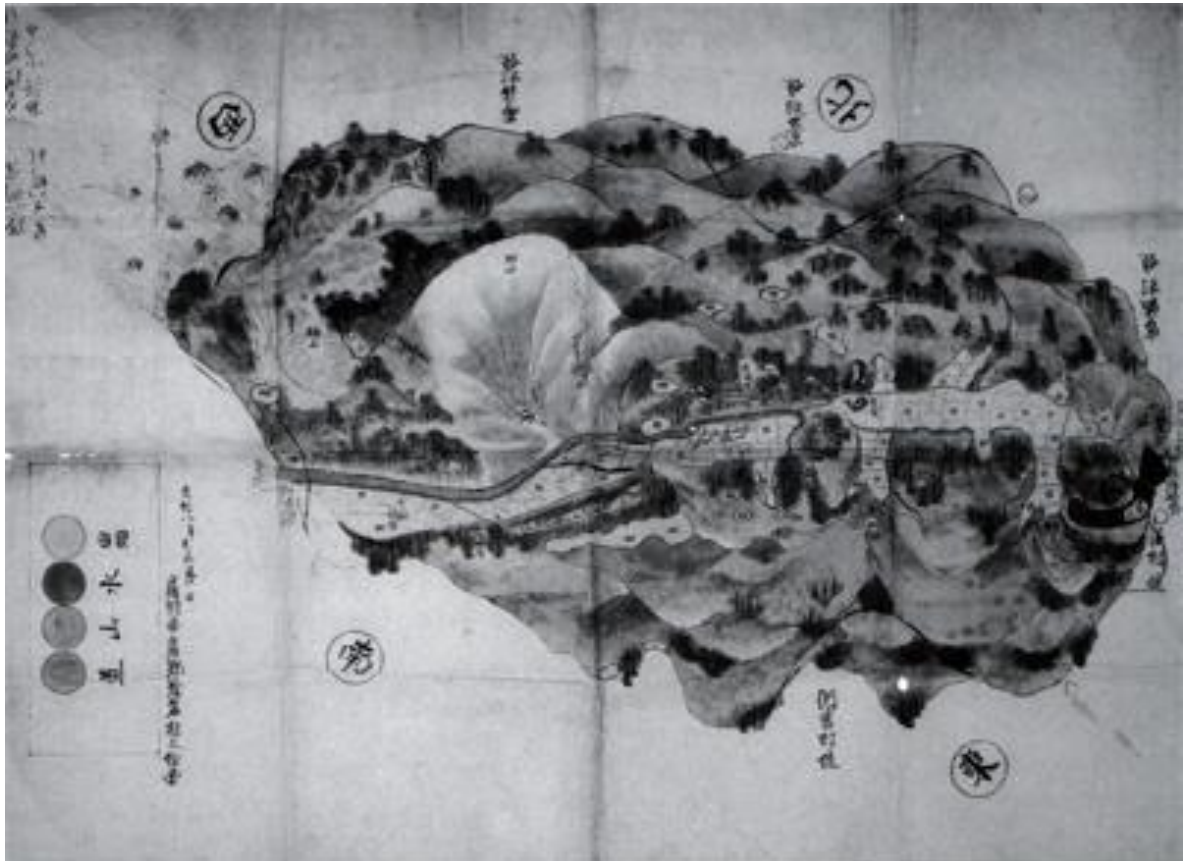


写真 3 茂名村絵図（文化 8 年(1811)） 茂名区蔵

ちなどによばれる道で、江戸時代に館山城下へ荷駄を運んだ道とも伝えられています。また、茂名村が里見氏の所領だった時代には、漁村から運ばれてきた魚を中継し、城下まで運ぶ荷役を負わされていたともいいます。

集落は、村の中心部を流れる茂名川に沿うような格好で、家並みが形成されています。谷の奥から、谷・中台・砂台の3組に分けられ、カミ・ナカ・シモという通称でよばれます。砂台の側の村の入口には、かつてその名のおり、平砂浦海岸から吹き上げられる砂によってできた、大きな砂山がありました。この砂山は、現在南国花木園に姿を変えています。江戸時代の村絵図にも記載されています。

生活は農業を中心に営まれています。谷間の集落であるため、川沿いの平坦地に開かれた田と、丘陵地に点在する畑が主な耕作地です。文化8年(1811)の茂名村絵図(写真3)には、村内の家屋配置や田畑が描かれていますが、現在の地図(第2図)と比べてみてもさほど変わっていないことがわかります。全体的に山がちな土地であることから、江戸時代の後期には、農間稼ぎとして、真木・柴・薪などを館山や柏崎の町場に売りにしていたことが記録されています。

2. 十二所神社と村の由来

十二所神社は、^{くにとこたちのみこと}国常立命をまつる茂名の鎮守です。神社に伝わる由緒書によれば、創設は養老2年(718)で、はじめ葦加比神社と称されていましたが、天正元年(1573)に村の戸数が12戸であったことから「十二尊宮」とよぶようになった、とされています。実際に、里見家没落後の元和4年(1618)、江戸幕府によって検地が行われた際の記録には、屋敷持が12名記されています。またこの由緒書には、十二所神社が里見家の祈願所としても機能していたことにもふれ、別当寺である成願寺で護摩を修めた、と記されています。

江戸時代後期の寛政5年(1793)の村明細帳には、村内の宮として、鎮守である十二天(現在の十二所神社)のほか、山神、^{ごず}牛頭天王、^{ほうそう}疱瘡神、大六天、天神、姥神の計7ヶ所が記されています。その後^{こんびら}金毘羅宮と浅間宮も勧請され、これらのうち、金毘羅・大六天・天神の3社は、明治以降に十二所神社に合祀されています。

このように、現在の茂名の原形がほぼできあがった江戸時代のはじめから、十二所神社は村の鎮守として、人びとの生活とともにありつづけてきました。茂名では、十二所神社を山の神だとする言い伝えもあるといえます。こうした信仰は、海をもたず、平坦な土地の少ない丘陵地帯にあって、稲作よりもむしろ、畑作や山林に依存せざるを得ない暮らしの中から自然に育まれたものともいえるでしょう。

十二所神社の祭礼は、毎年2月20日に行われ、里芋祭りの名でも知られるオビシヤ行事があわせて行われています。旧神戸村に属する各区では、昭和29年に館山市に合併した際に、それまで各区ごとにばらばらだった氏神の祭礼日を、安房神社の例大祭である8月10日に統一しました。茂名でも一時期そのとりきめに従いましたが、里芋祭りを伴うため、夏の時期の祭りには無理があり、旧来の2月20日を祭礼日として現在に至っています。十二所神社とその祭礼は、茂名の人びとにとって暮らしの要であり、心のよりどころであるともいえるのです。

(山本志乃)

参考文献

館山市立博物館『地区展シリーズ③神戸・富崎 安房開拓神話の里』1987年
館山市立博物館『村絵図の世界』1988年

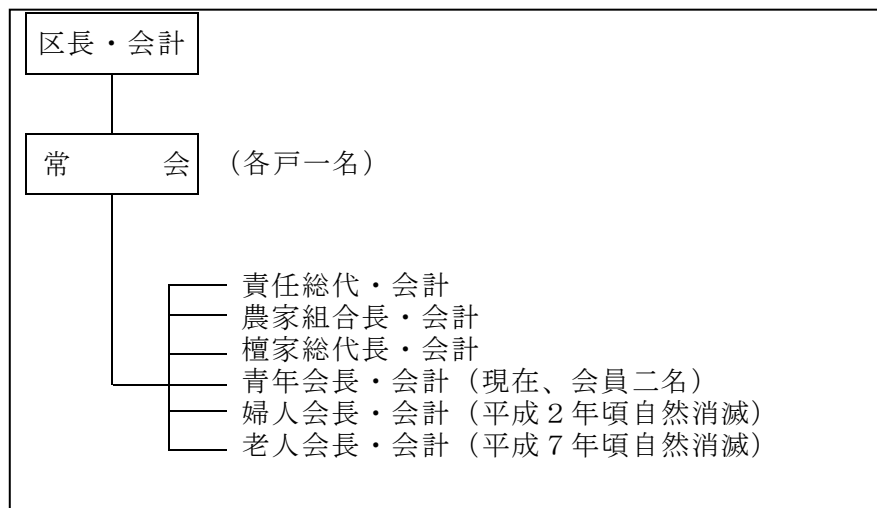
第2章 村のしくみ

茂名にはロッケンサマ（六軒様）の伝承があって、茂名の始まりは6軒の古い家筋によって開かれたものであるとされ、今でもその家筋がたどれると伝えています。茂名は江戸時代の終わりの頃より31軒の家で成り立ってきた村でした。明治になり新しい政府になるまで、茂名は名主と組頭、そして、百姓代によって自治がなされてきました。名主は一般的に世襲制の所が多かったなかで、茂名では名主役は交替制で勤めていました。

明治になって選挙制度が取り入れられるようになりましたが、茂名に選挙権のあった家は庄屋と石井家の本家とイシャドン（医者殿）の3軒だけであったと伝えています。明治になると茂名は神戸村の中に位置づけられ、集落全体が戸長・副戸長のもとで治められるようになりました。

しかし、茂名の中でいろいろな取り決めをしたり、個々のお金の徴集のために役立ってきたのは、毎月行われている常会でした。常会には各戸から1名ずつ、主に戸主が出席して、毎月25日に行われてきました。特に正月（3年ほど前から3月）に行われる常会はオオカンジョ（大勘定）といい、この時に前の年の決算報告がなされていました。

茂名は谷間を流れる茂名川の細流を中心にして、上流から谷（ヤツ）、中台（ナカダイ）、砂台（スナダイ）の3地区に分けられ、それぞれ、カミ、ナカ、シモとも呼んできました。茂名の役員は、各地区から2名ずつ輪番制によって選出され、選ばれた中から互選で、区長・会計、農家組合長・会計、責任総代長・会計などの役員を決めてきました。茂名で行われる行事は、以前はお寺を使っていましたが、昭和46年（1971）に集会所が完成し、それ以後、すべての行事はここで行われるようになりました。



第3図 茂名の組織図

1. 村の組織

平成17年4月1日現在、茂名の世帯数は36戸、人口94名です。茂名の公的役割には、区長・会計、農家組合長・会計、神社の責任総代長・会計があり、任期は2年です。茂名では、それぞれの役割は、すべて各区から輪番制で選出されています。こうした選出方法

は、区民館が出来てから後のこととされています。それ以来、茂名の区長と会計は2年の任期で、カミ・ナカ・シモから2名ずつ選出された合計6名のなかで、役割が振り分けられるようになりました。

また、この他に寺の管理を担う檀家総代長・会計も別に選ばれます。檀家総代長・会計は、この他に9月1日に行われるカゼゴモリ（風籠もり）の手配も行ってきました。お寺で行っていた行事でしたが、この行事も住民の各戸から1名ずつ出席して行われるので、現在では区民館で行われるようになっていきます。

茂名のしくみのうえで大きな関わりをもっているのが、当番とツミバンナカマ（積み番仲間）という里芋祭りの役割です。里芋祭りは、2月に行われる、氏神である十二所神社の祭りとなっていますが、かつては1年の農作物の豊穰を祈願するオビシヤで、毎年、輪番で廻ってくる当番の家で行ってきた茂名で最も重要な行事でした。

（1） 区長と会計

区長の役割は、館山市役所から出される行政連絡がその主なものですが、その他に集落内の取りまとめや、市政に対する要望などを受けてその申し入れをすることと、集落に関わる公的なことの折衝をすることがその役割です。したがって、その補佐役を兼ねて、会計が経理をまかされてきました。

また、区長は毎月各戸から1人ずつ出席して行われる常会を招集し、常会の時には議事の進行にたずさわります。常会を毎月行うのは、月々行われる区費などの徴集や、情報の交換、住民の要望や意見のとりまとめなどがあります。このように、常会を毎月行う事ができるのは、茂名の戸数が少ないことと、個々の家が離れているためでもあります。

議事は、十二所神社や浅間様などのことがらが、その主な議題となります。これらの議題はその都度、責任総代長から提案がなされます。また、農道や公道の修理、水源の堰の修理や管理などに関しては、農家組合長からというふうに提案がなされて、常会で承認されます。

（2） 農家組合長と会計

農家組合には、茂名の全ての家が加わっています。かつては、神戸農業協同組合に属していて、この中で館山市を通して、減反や稲の新種などの指導を受けてきたのですが、その後、神戸農協は安房農協になり、今はJ A安房神戸支店に所属しています。

農家組合は、水路の修理や川止め農道の整備などを主な仕事にしてきました。水路の修理などは常会を通して了承を得て行われてきました。農家組合は、私道以外の農道の管理も行ってきており、全戸から一人ずつ出て農道の整備を行ってきました。

茂名では、7月14日に行われる浅間神社のクサカリ（草刈り）と、館山の祭りが近づく7月30日に、茂名の入口である赤尾商店（鹿島屋）の所から、茂名の奥の照尾トンネルのところまでの草刈りをしています。これは、藤原や相浜・布良の人たちが通る道でもあるということで、各戸から1人ずつ出て草刈りをしてきました。

2. 祭事と組織

(1) 氏子と神社

十二所神社は茂名の氏神で、集落の上手の東側の山に南面して鎮座しています。社殿は平成12年(2002)に、権現造りの銅板葺に建て替えられました。祭神は、国常立命を主神として十二天様を祀ると伝えられています。しかし、神社の縁起にまつわる伝説では、母神にお乳が出なくて、甘酒を飲ませて育てたと伝える山の神の話に似た伝承があって、かつて、祭りによべられた人達には、甘酒を振る舞っていたと伝えています。

十二所神社の氏子は、茂名の27戸により構成されています。里芋祭りは、区長・会計、責任総代長・会計によって差配され、里芋まつり独自の役割である当番(年番)1名と、クミ(組〔別称ツミバン仲間〕)4名の、計5名によって進められます。

責任総代長と会計の任期は3年です。しかし、適任者が選ばれると、そのまま何年間も続けて、この役に就いているのが慣例になっています。氏神である十二所神社には、宮司はいません。したがって、祭りには、相浜神社の宮司を呼んで祭典が行われています。それゆえ、責任総代は神社の修理に関することや神社の祭祀に関わってきました。

(2) 里芋祭りの組織

里芋祭りは、トウバン(当番)とクミ(組)とよばれる役割の人々と、その親戚たちで行われます。トウバンは家並み順の輪番制で、集落の上の方から、家伝いにまわってきます。したがってトウバンの役は、約30年に一度回ってくることとなります。

トウバンの家は祭りの前日、各家で蒸かして持ってきた里芋を受け取って置いて、夕方から積み上げる里芋や、鏡餅、切り餅、供物の準備をしておきます。そして翌日、祭典のあと神社で行う供物のとりわけや、それをもらいにくる村人たちへの配付など、祭祀の中心的役割を担っています。

トウバンにあたる家は祭りになると忙しく、準備の期間中は隣家や組仲間、そして親類などに手伝ってもらいます。トウバンの交替は、里芋祭りが終わったあとに、トウバンの家で行います。この時、盃を交わして、トウバン渡しをする儀式があります。

里芋祭りで供物にする里芋は、2軒1組で12個ずつ供出されます。この2軒1組の家はクミと呼ばれていて、かつては茂名の集落30軒が、15組(現在は27軒が、14組)にわけられていました。この2軒1組の組み合わせは、昔から決まっていたとされていますが、どのような基準で組になったのかは分かっていません。

クミのその関係は、おおよそ集落の上の地区と、下の地区の家の組み合わせのようですが、本家と分家の関係でもありません。この組の2軒は一方をウケバンといい、他方をツミバンといって、ウケバンとツミバンはお互いに1年で交替し、ツミバンにあたる家が、その年の里芋を育てておいて、供出することになっています。

この関係を考える上で参考になるのは、次のような戦国大名里見氏に関わる伝承です。茂名には、かつて布良や相浜から運ばれてきた水産物を、茂名の郷蔵で引き継ぎ、要害道を通り照尾山を越えて、館山城に運んだ歴史があります。この時、2軒1組になり、2組で

荷を担いで運んだとされています。

この勤めはほぼ毎日であり、一度に4軒の家が出仕することになるので、当時31軒ほどしかない家数の茂名村では、その負担は大きかったといわれています。したがって、慶長19年（1614）に、館山城の城主であった里見家が改易になったときは、赤飯を炊いて神棚に供えて、3日間飲み食いしたという伝承があります。このクミの組織は、4人1組という里芋祭りのツミバンナカマと、ウケバンナカマという構成を考える上で、何らかの関わりがあるのではないかと考えられています。

（3） 浅間講の行事

現在、茂名で行われる行事で、里芋祭りについて、村組織のなかで主要な行事となっているのが、毎年7月17日に行われる浅間講です。浅間講は、戦前まで代参を送っていましたが、戦後、代参は行われずに行事だけが残っています。

浅間講は、富士山の山開きが行われる7月1日に合わせて、講中のなかから代参を立ててお参りしていました。そして、代参の者がもどって来たときに、スナハライ（砂払い）といって、代参者と共食する行事を行ってきたのでした。したがって、代参を済ませて戻ってきた時に合わせるので、片道半月ほどの日時が必要だったことになり、行事は7月14日に行われてきたものと思われます。

この日は早朝に、浅間神社までの道のクサカリ（草刈り）をして、午後に集会所で、共同の飲食をしています。また、浅間様の裸足参りも行っていたことが伝えられており、7月14日の早朝には各家の者がホウチョウ（小麦粉を練ってのぼして幅1cmほどのホウトウのようなもの）を作って、早朝に浅間様に供えにいったとされています。

また、スナハライというのは、一般的には旅に出掛けて戻ったときの反省会や、慰労会などにも用いられるようになりましたが、本来は代参に出掛けてきた人を迎えて、食事を共にすることをいったもので、この浅間講は、その本来の姿を伝えています。しかし、現在は、浅間講の当番など役員3名で浅間様に登って、お神酒と塩と米を供えてお参りをして、戻ってから食事を共にするだけになっています。

（4） 荒神様のオビシャ

茂名では、集落全体で祀る荒神様があります。3月7日の午前10時ごろ、相浜神社の宮司に来てもらって、当番の6人と、責任総代長と会計が参加して、荒神様にマサキ（柎）をあげて拝んでもらいます。この当番も、毎年集落の上から下へと2軒ずつまわってきます。けれども、責任総代長と会計がこの当番と重なった場合は、次の家に番がまわるので、家ごとの組み合わせは、その都度違ってきます。

荒神様のオビシャは、集会所で行います。この時は、当番と区の役員が参加して、宮司を主客にし、小・中学校長や、農協の支店長などを来賓に呼んで、お寿司などで接待し飲食します。かつては、個々の家の者たちも荒神様へお参りにでかけ、甘酒をつくって供えたりしたものであるといえます。

(5) 風こもり (9月1日) (一番風、二番風、三番風)

茂名では9月1日に、成願寺でカゼコモリ (風籠もり) を行ってきました。現在は、区民館で行っています。カゼコモリは、日が暮れてから重箱にそれぞれご馳走を入れて持ち寄り、お互いのものを取り交わし、飲み食いして夜を過ごします。

カゼコモリは稲の花が咲くころ、実りが良いようにと願って、二百十日の風を鎮める祈願をする籠もりでした。茂名ではこれを、9月1日に一番風、9月11日に二番風、9月21日に三番風と、三度もお籠りをしていたといひます。カゼコモリは、風ふたぎであるといひ、強い風を避けるためのお籠りをしたものであるといひます。この籠もりは、戸主たちが集まって行ってきた行事でした。

3. 青年団と婦人会

集落にある集団のなかで、青年団の果たす役割は大きいものがありました。戦後は青年会といひ、男女一緒の会になりましたが、以前はワカイシュウ (若衆) とよばれ、火事や災害時の出動や、冬場の夜回り、祭りの幟立てや各行事の協力など、ワカイシュウの労働力は、集落のなかで役立っていました。

青年団は、17歳から42歳の男子で構成されていました。戦後、男女一緒に、よりよい農村、農業をつくることを目的とした「4Hクラブ」などの活動をしてきましたが、若者たちが集落を離れるようになった昭和30年代以後は会員が少なくなり、平成になると実質上自然消滅してしまい、現在は会員2名だけになっています。

婦人は、戦時中の国防婦人会に始まったとされています。男性たちが徴用を解除されて戻ってくるまで、銃後の守りとして、それまで、男性たちが担ってきた地域の治安や防火、そして、消防活動などを受け継いで、その任にあたりました。

戦後、婦人は生活改善を旗印に新生活運動に力を注いできました。なかでも、食生活の改善や、地域の娯楽などに少なからず貢献してきましたが、テレビの普及などによってその目的も薄らいでしまい、平成になって、ついに自然消滅してしまいました。また、戦後生まれた老人会も、平成10年 (1998) 頃に消滅してしまいました。

4. 女性の関わり

家庭のなかで果たす主婦の役割は大きく、日常の掃除洗濯から食事、そして育児をはじめとして近隣や親戚との付き合いなどがありました。茂名の主婦で、明治生まれの人々のほとんどは、茂名生まれの人であったとされています。

それゆえ、家ごとのしきたりや集落の行事などは、子供の頃から知っていたので、嫁入りしても戸惑うことはなく、嫁と姑の争いなども、あまりなかったといひます。

集落の外から、茂名に嫁入りすることが多くなったのは、大正生まれの人たちからであるとされています。嫁入りした人は、茂名ではアネサンと呼ばれていました。現在の人たちのなかで、他の地区から嫁に来た人たちは、三芳村、館山の館野・神余、鴨川市、県外では埼玉県などの出身であるといひます。

よそから嫁入りした主婦たちは、茂名のしきたりを知らなかったことから、たいそう苦労したといひます。特に茂名には行事がいろいろあるので、それを知るのに苦労したといひます。茂名で月ごとに行われる常会には、戸主が出ます。また、全戸が参加する行事には、主に戸主が出ますが、女性だけが参加するオコモリ(お籠もり)や、ヒマチ(日待ち)などの行事もいくつかあり、これには年輩の女性たちが参加してきました。

オコモリは、春秋の彼岸明けに行われるヒガンゴモリ、お盆に行われるオボンゴモリ、そして、11月に行われるジュウヤゴモリ(お十夜籠もり)などがあります。ヒマチは、春彼岸と秋の彼岸あけに行われてきました。

茂名の主婦だけが参加する集まりは、里芋祭りのあとに行われる2月22日の、女のオビシヤでした。これは里芋祭りの期間中、里芋を蒸かしたり、来客の接待などをした主婦たちの慰労会であるとされていますが、主婦にとっては年に一度、集落の主婦たちと顔を合わせることのできる機会でもあったのです。

5. 村のつながり

茂名地区は農地が少なかったことから、山の斜面を耕して畑を作り、麦や里芋などを作ってきました。また、田もありましたが少なかったので、隣接した地区である洲宮や藤原に小作に出ていたといひます。現在も、洲宮の田を借りて耕している人もあり、洲宮に家を持っている人もいるので、洲宮の区費の分担金を納めている人があるといひます。

茂名には、明治10年(1877)に建てられた浅間社が祀られています。この石祠には、周旋方として先達以下7名の名が刻まれていて、講の社中の名が14名記されています。ここで興味深いのは、隣地である洲宮村からも寄進があつて、先達以下4名の名が記されているところを見ると、洲宮の地主の寄進によるものとも考えられそうです。

現在の農作物で、近隣とかかわりを持っているのはレタスの栽培です。このレタスの出荷は神戸地区の清浄野菜組合に加入していて、佐野や藤原との交流が保たれています。また、かつては花卉組合等もあつて、神戸地区の組合に所属していましたが、現在は花卉栽培をする家はなくなってしまいました。(田村 勇)



写真4 茂名の集会所を兼ねていた成願寺



写真5 現在の中心的建物である区民館

第3章 生業暦

1. 茂名のくらし

茂名の集落は、茂名川流域の小高い場所に家屋敷が並んでいます。そして、その暮らしは、村の男たちが、農作業の間に柴や薪作り、竹伐りなどの山稼ぎを中心にして、牛馬のマグサ（秣）刈り、あるいは、かつては平砂浦の浜まで出かけて行って、入会になっている藻草（カジメやアラメなどの海草）を採って、田の肥やしにするなどして、田作りの仕事にあたっていたといえます。また、田植えをするときは、ユイ（親戚同志の共同作業）でおこなっていて、田の草取りや畑仕事などは、主に主婦がこれにあたり、子供たちはその手伝いをしていました。

そして畑で採れたものは、主婦や老婦たちが背負って、要害（ヨウガイ）の山を越えて、宮城や柏崎の八百屋へ売りに出かけて行って、お金を換えて日用品を買って戻るというように、家族がそれぞれ家のなかで、暮らしとの関わりを持って生活していたのでした。

2. 茂名の農業

(1) 米作り

茂名は、江戸時代の昔からほぼ31軒の家があつて、茂名川に沿って、カミ（ヤツ）、ナカ（ナカダイ）、シモ（スナダイ）に家を構えていました。江戸時代の検地では、12軒で8町9反の田と、6町7反の畑を耕す、安房郡では標準的な規模の村であったとされています。

茂名で田を多く持っている家は、8反から1町歩を耕していたとされており、小作をしている家も10軒ほどあつて、5反ほどの田を耕していました。戦前は、米と麦の作付けをしていましたが、茂名の田のほとんどは湿田であったことから、麦作には不向きで、麦は山の斜面を切り開くなどして開墾された畑で、栽培されていました。麦作は、畑に稲藁を入れて土ならしをしたあと、種をまきました。

5月に田植えをして9月に刈りとりをしたあと、10月には畑に麦を植えて、翌年5月に刈り取るというように、1年間のほとんどが、田と畑の仕事にかかわって生活をしていました。

人力では限りがあるので、田を耕すには馬を使っていたのですが、日露戦争の頃から戦地の運送などに馬が使われるようになっていき、特に第2次世界大戦では、軍馬として馬が徴用されたので、牛がこれに代わるようになりました。馬と牛に食べさせるマグサ（秣）を刈るしごとは、大変な作業でした。

茂名の米は土壌が粘土質なので、美味しいとされてきました。茂名川の谷の奥には溜井が2箇所あつて、渇水期には茂名川を塞ぎ止め、川堰を作って米を育ててきました。茂名は谷あいにあるので、洪水の被害を受けることはなかったのですが、下流はその被害を受けて砂が流れ出るので、隣の洲宮との境界が変化して、時々、境界の争いが起きていたと伝えられています。

現在、茂名の田は15町歩半、畑は25町歩、山は50町歩あるとされており、各家は約4反（120 m²）の田を耕しているとされています。茂名では耕地がさほど多くないので、多

くの農家は小作に出て、田持ちの家の田を耕す習慣があったとされています。この習慣は今でもあって、隣の洲宮や藤原の田を借りて、米作りをしている家が数軒あります。

昔の米作りは肥料が大変でした。茂名では昔から「畑に稲藁、田には畑の草」といってきました。つまり、畑には刈り取った稲藁を束ねて畝に埋め込み、田にはカッチといって畑に生えたレンゲ草や、カラスノエンドウなどの生の草、落花生の枝殻を乾燥させておいたものなどを入れ込んで、元肥にしました。

田起こしはハンデといって、戦前は馬に鋤(スキ)をつけて行い、これを馬鍬(マンガ)でならしてシロカキをしました。ナワシロは、水の便のよい家の近くの田に苗代作りをして、田植えの35日前に種まきをしました。昭和40年(1965)頃まで、苗代作りをして種まきが終わると、子供たちはタナヅイといって、正月に飾った荒巻をおかずにした弁当をもって、3日間ほどトリオバ(鳥追い場)と呼んだ砂台の山に登って遊ぶ行事がありました。

また、田植えのあとは虫送りがありました。これもこどもたちが出て、おこなっていました。虫送りは昭和30年(1955)頃まで続いていました。虫送りは、篠竹の新子竹をきってその中にバッタなどの虫を入れて草で封をし、これを2つ縛ったものを竹竿に付けて担いで、成願寺から布沼の村境まで行って送りました。

作業名/月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
ハンデイウナイ													
クロヌリ(1)													
クレゲエン													
クロヌリ(2)													
アラシロ													
タネマキ													
ケイダ													
シロカキ(ホンジロ)													
ワセダウエ													
ホンダウエ													
ムシオクリ													
一番グサ													
二番グサ													
ヒエヌキ													
イネカリ													
コイアゲ													

第4図 稲作暦

(2) 麦作り

茂名の田は粘土質なので、冬場は乾燥することが条件である麦畑には向かないため、二期作をする条件に適した所は少なく、ほとんどの家では、山間などに麦畑を作っていました。麦畑の元肥は、藁束を束ねたものを畑の畝の間に入れました。

肥料は戦前から人糞も使っていました。また、魚を調理した残りの内蔵などを、便所に入れて発酵させておいて、これも肥料にしたこともありました。自分の家の物で足りないときは野菜などを持っていき、肥桶を馬に積んで、館山の城山の下まで行って、汲ませてもらっていたこともありました。

麦畑では大麦と小麦を作っていました。大麦は、主に自家用にしていました。戦前はイマシムギといって、ゆで上げたものをしばらく漬けておいて、柔らかくして米に混ぜて炊

いてたべました。6月に刈り取った大麦は束ね、穂を焼いて粳にしてから大白について脱穀しました。その後、鹿島屋に持って行って、脱穀機にかけてもらうようになりました。また、戦後になって、精米所でローラーをかけて、ツブシムギにしてくれるようになったのですが、そのうちに麦飯を食べることはしなくなり、大麦も作らなくなりました。

小麦は換金作物として、供出用として作りました。自家用にする時の小麦は、石臼で粉にして、ホウチョウ(うどん)にして食べるなどしましたが、戦後、小麦粉が売り出され、いつでも手に入るようになってからは、輸入物におされて採算がとれなくなったので、作らなくなってしまいました。

作業名/月		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
ムギ 麦	ハタケウナイ													
	タネマキ													年内
	ゴウロオコシ													
	クサトリ													
	カリトリ													

第5図 麦作暦

3. 山の仕事

(1) 木だし

茂名の男たちは、農閑期を利用して山仕事に出ました。山の仕事は、薪にする雑木の薪出しや竹伐りの仕事でした。薪出しの仕事は、雑木山を山主から買った山師が、木の伐採を茂名の知人に頼むという仕組みになっていました。茂名では、10~15人ほどの人がキリコ(伐り子)に頼まれましたが、伐りだすときは20~30人ほども必要とされました。

戦後すぐのころ、幾らでも薪の売れたときは、茂名に戻ってきた若者たちが、多くいました。若者たちは雇われて薪出しに出掛け、伐採した木を薪に束ねるなどの仕事をしました。1束ごとに歩合がついたので、仕事量がはっきりわかり、やり甲斐がありました。また、期間が長い仕事なので、安定性のある仕事であったといえます。

薪出しは、木伐り、そして、割って束ねて積み上げて置く仕事があります。山に囲まれた茂名の地域では、12月から2月頃までの3カ月の農閑期は、戦前からこのような仕事がありました。そして、そのような仕事の無いときは、自分の山の雑木を伐らせてもらい、家に運んで薪にしたり、炭を焼いたりしていました。

薪は1尺2,3寸(約33cm)の長さに切り、これを割って10本ほどを一束にしたものでした。戦前から戦後の一時期にかけての燃料は、炭や薪でしたので、いくらでも売れたものでした。戦後すぐのころ薪は、10円から15円で売れたといえます。

茂名の子供や主婦や老人たちは、これをイチワ(1束)からサンワ(3束)ほど背負って、ヨウゲ(要害)の山を越えて、館山の宮城まで売りに行ったといえます。また、海辺の相浜や布良へも薪売りに行ったと伝えています。

(2) 炭焼き

茂名の男たちの仕事の一つに、炭焼きがありました。炭窯は茂名には5つほどあって、2

～3人で組んで、炭を焼いていました。戦後すぐのころは、炭の需要があって、1カ月に4度ほど焼くことができました。3人で作った炭窯を、輪番で使って焼いていました。

炭を焼く原木は、農閑期の11月から2月、自分に番が回ってきたときに、持ち山から伐り出しました。炭木は窯に合わせて、70cmほどに切りそろえて、枯れ枝などの粗朶木(山の下刈りした木)を敷いた上に、生木のまま窯に立て、並べてつめこみ、その上にまた粗朶木をつめて、火をつけました。

炭は焼き上げるまで、ほぼ1週間かかりました。初日に木入れをしてこれに火をつけ、2～3日ほどかけて全体に火がまわってから窯の入口を塞ぎ、それから2～3日ほど置いて、冷め切ったところに窯の口を開いて、焼き上がった炭の窯出しをしました。

窯出した炭は、25,6cmほどに切りそろえて炭俵に詰めました。炭俵を作るのは、老人の仕事でした。炭俵は4貫(12kg)入るように編み上げられ、底と蓋には、伐採した時に切り落とした枝の葉のついた先の部分を折り曲げて、荒縄で締め上げて炭俵にしました。

炭は一窯で、20～23俵ほど焼くことができました。炭は、あらかじめ注文を受けていた館山の宮城あたりの家に、炭俵でとどけました。炭俵は、荷車やリヤカーに積み、現在の国道410号線の切り通しを通過して運びました。戦前は、老婦が子供と背中に炭俵を背負い、要害道を越えて売りに行っていたといえます。

4. 換金作物

(1) 茂名イモづくり

農家の人々にとって、野菜は食生活の必需品であるばかりではなく、換金作物として貴重な収入源でした。なかでも、モナイモ(茂名芋)と呼ばれたアカメ芋は、その名のとおり茂名の特産で、大きく味がよいことから、館山の宮城あたりでは人気がありました。

茂名芋は、里芋祭りに用いられる芋です。茂名では1軒で5～6畝(150～180坪)も、栽培していました。モナイモは、毎年4月の下旬から5月の上旬に種芋の植えつけをして、途中で追肥をして育て、10月から11月にかけて収穫しました。収穫した芋は、イモノアナ(芋の貯蔵穴)で冬のあいだ保管しておき、昔は12月から1月にかけて、要害の山を越えて、館山の宮城や柏崎、沼の八百屋に売りにいきました。

(2) 野菜づくり

茂名の野菜の主なものは里芋でした。里芋の種類は、ヤツガシラや茂名芋と、ナツイモ(きぬかつぎ)を主に育ててきました。また、戦後すぐの頃、神戸地区の佐野に、サツマイモの澱粉工場があり、作ればいくらでも売れたので、一時はどの家でもサツマイモを作っていました。

また、砂地のところでは、夏場は落花生、冬場はソラマメやエンドウ豆を育てていました。これらの野菜は、戦後も昭和20年(1945)から35年(1960)ごろには良く売れ、八百屋が買い取りに来たほどで、館山の八百屋でも、すぐに、すべてを引き取ってくれました。その後、館山の丸中青果市場に卸すなどしているうちに、一本化して農協で扱うようにな

りました。そのほか、ゴボウやニンジン、ジャガイモ、サツマイモなどを栽培していました。しかし、大量に育てていなかったことから、多くは自分の家で消費することが多かったようです。

作業名/月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
落花生						■				▲			
エンドウマメ				▲							■		
ソラマメ					▲						■		
モナイモ				■								▲	
ヤツガシラ				■								▲	
ナツイモ				■								▲	
サツマイモ						■						▲	
スイカ					■			▲					
ゴボウ				■								▲	
ニンジン				■								▲	
ダイコン		▲							■				
ジャガイモ			■				▲						
ホウレンソウ								■				▲	
トマト				■		▲							

第 6 図 蔬菜の生産暦 (■植付け ▲収穫)

(3) 盆花づくり

茂名の農家の換金花卉で、比較的安定していたのは、戦後に需要の出たソテツの切り葉でした。茂名には、花卉組合に加入している家が 12,3 軒あって、ここに切り葉を出していました。また、茂名で古くから得ていた副収入は、年輩者たちによる盆花づくりでした。

盆花は、お盆に墓の花瓶に供えるものです。南房総では、アスナロの葉やヒノキの葉を束ねてお墓に供えました。また、お墓に洗い米やウリなどを供えますが、これを供える時に、下に敷くコモなども作って売りに行きました。

なお、昔のお墓は花を供える花立てなどなかったことから、竹の筒を作って、これをお墓の両側の地べたにさし立てて、花立てにしたものでした。この竹の筒も良く売れたもので、老人たちはこれを作って、背負って館山の宮城へ売りに行きました。お墓に供えるアスナロは春秋の彼岸や祭り、そしてお盆や正月もお墓に供える習慣があったので、需要があったのです。
(田村 勇)



写真 6 里芋畑と稲田



写真 7 レタス畑

第4章 茂名の年中行事

茂名地区では、ことあるごとに、集落内の人々が集まる行事が行われます。里芋祭りと呼ばれる十二所神社の祭礼やオビシャ、稲作の始まりと終わりに行われるヒマチ、また年配女性達のオコモリなどです。また、昭和30年(1955)ころまでは、子供たちで行う虫送りや、茂名の成願寺で、人々がにぎやかに鉦を叩き、念仏と共に大数珠を回したり、子供たちに団子をふるまったりする、十夜の行事も盛んだったそうです。なお、茂名区は大きく「谷台(ヤツダイ)(上)」、「中台(ナカダイ)(中)」、「砂台(スナダイ)または砂(下)」の3つの地区に分かれています。茂名全体で行われる様々な行事は、それぞれ当番制でごちそうを用意します。いずれの行事の当番も、谷台→中台→砂台の順に上から下へと回ります。茂名の戸数は約30戸なので、1つの行事の当番は約30年に1度ですが、サイクルが違っているため、数年おきにさまざまな当番が回ってくるようになります。

こうしたムラ(村)の年中行事がにぎやかに行われる一方で、各戸それぞれが独自に行うイエ(家)の年中行事も残されています。ここでは、茂名のムラ全体の年中行事と、各イエごとの年中行事について、かつて行われていたものと現在の状況を、あわせて記録します。ただし、イエごとの行事はそれぞれかなり差異があり、そのすべてを調査することはできませんでした。茂名にはこのような例もある、というようにご理解ください。

1. ムラ(村)の年中行事(平成16年(2004)現在)

■ 12月末(正月の準備)

12月29日には、各家が総出で十二所神社と浅間様の掃除を行います。暮れの掃除が終わってきれいになった十二所神社と浅間様に、里芋祭り(オビシャ)の当番の家が、注連飾りと供え餅を飾ります。十二所神社では、拝殿のほか境内の祠5カ所くらいの小社にも飾り、供え餅も供えます。それぞれ鳥居や祠の上に、三つ編みの注連飾りを取り付けます。

■ 2月19~21日(里芋祭り)

現在「里芋祭り」と呼ばれる行事は、かつてはオビシャの際に行われていました。今は、十二所神社のマチ(祭礼)とその翌日に行われていたオビシャとが結びつき、一連の行事「里芋祭り」として整えられています。「里芋祭り」の詳細は、第5章をご参照ください。

■ 3月7日(荒神様のオビシャ)

茂名では、各家の屋敷地内(北西の隅が多い)に祀る神様を荒神様と呼びますが、これとは別に、区全体の荒神様があります。小さな石の祠で火の神様です。元名主の屋敷内にありましたが、家人が引っ越してしまったため、平成18年(2006)に、砂山の一角に移されました。3月7日は荒神様のオビシャで、昔は各家もお参り行ったり、また甘酒を作って供えたり、隣近所に配る家もありました。現在は、朝10時頃に当番6人と総代2名が荒神様に集まり、マサキをあげて、神職におがんでもらいます。戻ってきたら、区民館でお寿司などを食べます。荒神様の当番は上・中・下から各2名、計6人からなります。毎年順番で上から下に2軒ずつ回ってきます。ただしその年、区の役員になっている家は抜かします。

■ 春・秋(オヒマチ)

春と秋の2回、田んぼの作業が始まる前と終わった後にオヒマチを行います。日取りはその年ごとに、区で決めます。昔はヒマチの当番の地区が、各家を籠を背負って回り、お

ないので、最初からたくさんご飯を食べてしまい、最後の盛りきりご飯が出た頃には食べられなくなってしまったといいます。最後に食べられなかったら「仲人つれてあやまりに來い」などと言ったものだそうです。その後、残ったごはんは、上にあんこをのせてぼた餅にし、持ち帰って食べました。現在は、仕出し料理をとって費用は各戸割りで続けます。

■ 7月14日か近い日曜日（浅間様のお籠もり／夏なぎ）

この日は、車道から浅間様に向かう道と、同じく車道から十二所神社に向かう道を、朝から地区の人たちが総出で手分けして、草刈りをします。これを「夏なぎ」と呼びます。ただし、新盆の家は神様には触れないものとされ、寺の掃除をしたりします。

そしてこの日は、「浅間様のお籠もり」の日でもあります。昔は集落の中で当番の者が富士山に参拝し、戻ってきたら無事に帰還したことのお礼の意味で、7月14日に集落中が集まって飲み食いをしました。浅間神社は、茂名の共有地である砂台の「砂山(現在の南国花木園)」の一番高いところにあり、かつて富士山が見える場所でもありました。昔はこの神社のある山に、当番が茶釜や五徳を、そして集落の全員は銘々お茶受けなどを持っていき、現地で拾った薪でお茶をたてて楽しんだといいます。現在は当番が代表で、お茶やお酒を供え、そのほかの家の人々は区民館で待っています。この日は本来、早朝に各家の者が裸足で「ハウチョウ」を持って、浅間神社に供えるのが決まりでした。「ハウチョウ」とは、トンパチという瀬戸物の大きな鉢などで小麦粉をこねて、棒でのばし、1cmあまりの幅に切った平たい麺です。長さは家によって違います。これをゆでて、きな粉をかけて食べました。忙しい人は、そうめんを代用してもよかったです。なお、浅間様の当番は、上～下に近所2軒ずつ組みますが、神社の役員は抜かすので、組む家はその都度かわっていきます。

こうした「お富士講」は、茂名区も含む旧神戸村の各地区で行っていたといいます。

■ 秋・彼岸・盆（お籠もり）

秋に、念仏の人達が、成願寺で十夜籠もりを行っています。比較的年配の女性たち13～15人位が、午後1時30分～3時30分頃まで、鉦を叩きながら十三仏の念仏を唱えたり、お茶を楽しんだりします。春秋2回の彼岸籠もりや、8月のお盆籠もりも同様です。

■ 9月1日（風籠もり）

二百十日の頃に戸主たちが集まり、飲み食いを共にします。風除けの行事で昔は成願寺、今は区民館で行います。

■ 出産前（イナコウジンのお籠もり）

イナコウジンは「胞衣荒神」のことかといわれています。村の中の女性が、初めてのお産の時には、生まれる1ヶ月から10日位前に安産祈願をします。生まれる家の人のご馳走を作って、昔は成願寺、今は区民館で、村の人たちをもてなします。子供が生まれたら、名前を報告しながらもう一度もてなしをします。今も子供が生まれたら、行っています。

2. かつて行われていた行事（昭和30～40年代まで）

■ 2月21, 22日（オビシャ）

オビシャと呼ぶ行事は、千葉県下をはじめ、関東地方一帯で広く行われる年始のムラの集会行事です。一般には「御歩射」、「御奉射」などの字をあて、当初の形態としては、的に矢を射て1年の豊凶を占う行事だったようですが、現在は、当番の家や神社などに村人

が集まり、飲食を共にするだけのところも多くあります。そして、オビシャではたいてい、トウ渡しなどという当番の引き継ぎが行われます。その後、全員で飲食を共にし、1年の決まり事などを話し合ったりするのです。この時には、理想郷とされる「蓬莱山」の形を象った作り物が作られることもよくあります。山に松竹梅などを刺し、鶴亀を添える形が一般的です。材料には、聖護院大根や里芋などを使い、これを造作することもあります。

昭和21年(1946)まで、2月20日が十二所神社の祭典、21日がオビシャ、22日が女性たちによるオビシャゴモリでした。20日の晩に里芋の飾り物を作り、21日に当番の家に持ち寄って飾りました。2軒1組の積み番仲間が、それぞれ一山の里芋の山を作ったので、約30戸の茂名全体で15山ほどが並びました。積み番仲間は昔から決まっています、分家した家が出ると、新しい家同士で仲間になるので、必ずしも近所ではなく、離れた家同士も多いのです。

オビシャの当番は積み番仲間とは別に、1軒ずつ順番に回ってきます。当番はオビシャの場所を用意し、ご馳走を整え、また甘酒を作って当日の朝に振る舞うなど、責任の重いものでした。またオビシャの当番の家は、元旦に十二所神社の注連縄と門松を準備したり、節分の夕方にも十二所神社にお参りに行ったりと、1年間を通して神社の管理を任せられます。また、昭和50年代頃まで、オビシャのための「オビシャ^だ田」を作っていました。これは山の中にある5畝ほどの田で、その年の当番が耕作し、収穫した米で酒を買うなど、オビシャの準備の足しにしていました。

■ 4月末～5月初め（タナドイ）

昭和40年(1965)頃まで、4月末から5月初めにかけて、タナドイが行われていました。タナドイとは「種子時」のことをさすらしく、春先、田んぼの苗代を作り終えた頃を見計らって行われたのです。この日子供達は、砂山のトリオバ(鳥追い場)に弁当を持って集まります。弁当には正月に神棚の前に下げた鮭を大事にとっておいて、この時に初めて、薄くそいだ物を食べることができました。トリオバでは、鳥が逃げるように相撲をとったり、ワーワー騒いだりして賑やかに遊んだといえます。

■ 春（虫送り）

虫送りは昭和30年(1955)頃まで行われていました。この日までに子供たちは、しんこ竹(新竹)の節を切って、蓋をつけたものに虫を入れ、これを2つ結んだものを用意しておいて、1人ずつこれを持って成願寺に集まります。寺では、役員が竹の棒を交差して支柱にした物を用意しており、ここにそれぞれ持参した竹筒を引っ掛けました。これを子供が2人で肩に担いで、他の子供達はあとについて行列しながら村の田んぼを回りました(第8図参照)。1人が行列の先導で、直径40cmほどの大きなすり鉢を持って叩き、「オークンドー、オークンド」「稲の虫オークンド」と囃して回るのです。堰や溜め池まで来ると、鉢を投げ込んで引き上げ、また最後は、隣集落との境に持っていき、竹筒ごとつぶして投げ捨てます。終わると、また成願寺に戻り、役員からお菓子などをもらいました。

■ 秋（お十夜）

昭和30年代までは、秋のシラハ(在来種の小振りな蜜柑)が明るむ頃に3日間位、成願寺でお十夜を行いました。大きな数珠を回して、念仏を唱えることが行事の中心でした。念仏の参加者は女性が多かったようですが、男性で参加する人もいました。また、団子を作って子供に配ったり、釣り鐘を叩いたりして、大変賑やかであったといえます。谷藤原の人など、2～3人が、毎年シラハや煎餅など露店を出していました。

■ 時期不明（金比羅様のオビシャ）

十二所神社に、金比羅様が合祀されています。戦前までは金比羅様だけのオビシャがあり、その時は幟を立ててお寺で飲み食いしました。区全体で行い、当番はありませんでした。

■ 随時（疱瘡籠もり）

子供が小学校で疱瘡（天然痘）を植えてくると、その家の人がご馳走を作って、区民館で村の人々をもてなしました。

3. イエ（家）の年中行事

■ 12月末（正月の準備）

注連飾りを飾る家は少なくなっていますが、かつて大抵の家では、自分で注連飾りを作り飾っていました。飾る場所は家によりまちまちですが、屋敷の入口、玄関、神棚、仏様、オカミ様（台所の神）、荒神様（屋敷神）、井戸神様などです。注連飾りを作る場合は、12月下旬に作っておいて、大体12月30日頃に飾ります。「一夜飾りはいけない」といい、31日には飾りません。また屋敷の入口に注連縄を張り渡すことも行われます。これは安房地方ではよく行われており、1年中張ったままにしている風景は特徴的です。3ないし4枚のシデを垂らし、真中にウラジロと橙、足の上に唐辛子1本と生米を包んだ半紙を挟み込む家もあります。注連を張った立ち木などの根元には、それぞれ竹・松・シイノハ（シイッパ）の木の門松を立てます。神棚には、麻縄、スルメイカ、昆布、塩鮭（または塩鱒）を掛けたり並べたりして飾ります。この時飾る塩鮭（塩鱒）は、タナドイの時に子供達のお弁当のおかずにするようになっており、それまで食べずにとっておきました。

餅は「ク（苦）餅」といって29日には搗かず、28日か30日に搗きます。供え餅は2段重ねで、供える場所は、神棚、仏様、オカミ様、荒神様、井戸神様などという家が多かったようです。なかには、神棚に大神宮様の餅の他、鍬の神様や鎌の神様など、それぞれ農道具の神様の分として、小さい餅を何重ねも飾る家もあります。また、十二所神社の分の小さい餅1組を置いておいて、三が日のうちに神社に供えに行ったりします。

■ 1月1日～3日（7日）（正月）

元旦の早朝には、男性が雑煮を作ります。まず、神様に小さく切った里芋と大根、餅をあわびの貝殻などを器にして供えます。汁は入れません。供える場所は神棚（大神宮様）、仏様、オカミ様、荒神様、井戸神様などです。お昼は雑煮の代わりにご飯をあげるという家もあります。また家族が食べる雑煮は、大根や里芋、焼いた餅などを具とし、かつおだしのすまし汁で作ります。朝食は雑煮、昼と夜はご飯を炊いて、おせち料理などを食べて過ごします。昔は毎朝7日間雑煮を作る家が多かったのですが、今は三が日だけとなっているようです。

正月三が日のうちに、茂名の各家では、大体十二所神社に参拝します。この時に小さな供え餅を持って行って供え、代わりに前に供えてある餅をもらってきます。持ち帰った餅は神棚に供え、1月11日の蔵開きの時まで他の飾りと共に飾っておきます。また参拝した時に、神社の縁の下の人の踏まない砂を半紙に包んでいただいてきて、持ち帰ったあとは、家の周りのところどころにつまんで置くようにすると、魔よけになるという家もあります。

■ 1月7日（七草）

1月7日は七草です。この日の雑煮には、セリ、または小松菜やタシ菜のような青物を何か入れて作り、神様の雑煮にも青物をゆでて添えます。門松は、大体1月7日にとって

しまいますが、1月15日までにとればよいともいいます。

■ 1月11日（蔵開き）

1月11日は蔵開きです。米を入れてある倉庫の戸を、しばらく開けておきます。この日に門口以外の飾り物供え物を、すべてとってしまう家が多いようです。さげた供え餅は、雑煮にして食べたりしました。お飾りと門松はまとめておいて、風の無い日に庭で燃して、その灰を家の周りにまいて魔よけとしたりします。

■ 1月15日

この日までに餅を搗いておいて、1月15日に神棚、仏様、オカミ様、荒神様、井戸神様の5ヶ所に、再度供える家もあります。

■ 2月3日（節分）

節分には、大豆の木に大根と鯛の頭をさして、トモベラの木とヒイラギの枝を玄関や戸口にさします。少し前までは、目籠を長い物干し竿の先に吊るして、玄関の前に立てる家もありました。また豆まきもします。「鬼は外、福は内」といいながら各部屋で豆をまき、終わったら、家族の数だけ用意した半紙に、各人が年の数に一つ足して豆を入れ、食べます。

■ 3月3日（節句）

長女の初節句には、親戚を呼んでごちそうをします。

■ 5月5日

長男の初節句にも、親戚を呼んでごちそうします。引き出物には、柏餅を作って配りました。現在は、店で買ってきます。また庭先に鯉のぼりを立て、玄関にはショウブとヨモギを置きました。またショウブとヨモギを束ねて、お風呂に入れたショウブ湯をたてます。男の子は、ショウブで頭に鉢巻をして、風呂に入ったりしました。

■ 7月7日（七夕）

笹竹に願い事を書いた短冊をつけて玄関に飾り、翌日川へ流します。子供がいる家では、よく行っていました。

■ 8月（盆）

① 8月13日（盆棚作り） 8月13日の午前中に、盆棚を作ります。盆棚は、仏壇の前に竹などで四角い枠を組み立てて作ります。棚の上には縄を巻き、縄目に細く切った色紙と、ほおずきを挟んで垂らします。棚の上にはカヤで編んだゴザを敷き、その上に里芋（水芋）の葉をおき、里芋の葉の上に、果物やサツマイモ、瓜やナスを丸のまま供え、里芋の茎をツイボ（杖）だといって、2本添えます。脇に線香、花立て、米、ミソハギを浸した水の器などを置きます。棚の下には、畳にゴザなどの敷物を敷いて、その上にカヤのゴザ、里芋の葉に供え物、里芋のツイボなどをもう一つ飾ります。盆棚の上は家の人の供養のため、棚の下は無縁仏の供養のためのものとされます。盆棚を作ったら、そうめんをゆでて少量供えます。13日の午後から14日にかけて、成願寺の住職が家々を回ってくるので、お経をあげてもらいます。

（迎え火） 13日の夕方5時頃、なるべく早く明るいうちに、屋敷の門口で迎え火を焚きます。昔は麦を作っていたので麦藁の束を燃しましたが、今は稲藁の束を燃す家が多いようです。まず盆棚から米、ミソハギと水を器ごと、そして藁束と線香を持って出ます。門口で藁束に火をつけ、この中に米を撒き、ミソハギで水をふりかけながら、「焼き米食い食い、お水を飲み飲み、この明かりでござらっしゃい」と唱えます。また線香をちぎって火

にくべ、煙を出すようにします。一度家に戻り、提灯と蠟燭、線香、瓜とナスを輪切りにしたものを里芋の葉にのせたもの、盆棚に供えてあったそうめんなどを持って墓へ行きます。墓所で提灯に火を灯し、提灯掛けにかけて、墓参します。また墓石の前に、瓜とナスをのせた里芋の葉を供えます。提灯の火を灯したまま家に持ち帰り、「^{かど}門提灯」といってしばらく蠟燭が消えるまで門口につけておきます。今は危ないので、蠟燭の代わりに電池の電球を入れている家が多いようです。夕食にはそうめんを食べます。

② 8月14日 この日は「ホトケ様(ご先祖様)が1日中家にいる」といいます。このため家族は仏の留守番をして、水とミソハギを1日に7回取り替えなければならないという家もあります。14日の朝にも墓参りに行きますが、この時は前日に盆棚に供えていたそうめんを持って行き、墓前の里芋の葉のナス、瓜の上にのせてきます。盆棚には朝はそうめん、昼はごはんを供えます。また海苔巻や五目寿司、稲荷寿司など作ることもあり、これを供えたりもします。

③ 8月15日(ホトケの外出) この日は「仏様が那古寺に出かける」といい、朝早くご飯を炊き、弁当としてピンポン玉大の大きさのおにぎりを2個作り盆棚に供えます。おにぎりにはそれぞれカヤの箸を1本ずつ突き刺して皿に盛ります。この日は「仏様も出かけているので、家族も畑や外に出てもよい」といいました。仏様は夕方に帰ってくるというので、夕方そうめんをあげます。

(送り火) 15日のなるべく遅く、夕方6時~7時頃に門口で送り火を焚きます。迎え火と同じように、米と水を藁の火に入れながら、「^{やんごめ}焼き米食い食い、お水を飲み飲み、この明かりで戻らっしゃれ」と唱えます。そして、火をつけた提灯を持って墓に参り、帰ってくるのです。

④ 8月16日 16日には、盆棚を片付けます。カヤのゴザに供え物を巻いて、昔は川に流しました。

■ 旧暦9月15日(十八夜様)

旧9月15日に、十八夜様をやる家もありました。この日は餅を搗き、1升くらいの大きな供え餅を一つ作ります。これをオハチ(おひつ)の蓋の上のにせ、月が昇るまではこれとススキの穂を、大神宮様に供えておきました。また、この頃シラハミカンが色づくので、これをあげることもありました。月が昇ると、餅をのせたオハチを子供の頭のにせ、月を見せました。また残りの餅は、中にあんこを包んだアンビン餅にして食べたそうです。

このように、茂名では、ムラとイエ、それぞれでさまざまな年間の行事が行われてきました。少子化などに伴い、そのいくつかは行われなくなりましたが、かつての様子からすると、安房地方全域で行われていた特徴的な行事のやり方を、茂名の人々も伝えていたと思われます。その中で、十二所神社の祭礼とオビシャが融合した「里芋祭り」は、茂名の最大の行事であり、固く受け継がれてきたものなのです。

なお年中行事から茂名の空間をみると、神社や寺など重要なポイントが数カ所あります。なかでも興味深いのが「砂山」です。ここには浅間神社が置かれ、新たにムラ持ちの荒神様に移されました。かつてタナドイの行事では、ここに子供たちが集まり、鳥を追うための遊びに興じました。また虫送りではその裏手の村境から虫を送ったといえます。砂山は茂名の共有地であっただけでなく、一種の宗教的空間であったことが窺えます。(榎 美香)

第5章 茂名の里芋祭りについて

1. 里芋祭りの移り変わり

里芋祭りは、現在、2月19日から21日の3日間、茂名の鎮守である十二所神社の祭りにともなっていて行われます。茂名で栽培された里芋を用いて、独特の山型の奉納物を作ることから、その名前があります。

現在は、2月20日に行われる十二所神社の祭りにあわせて、その前日に里芋の山を一对作り、これを祭り当日に神社に奉納することが主眼となっていますが、昭和21年(1946)までは、祭りの翌日、すなわち2月21日に当番の家で行われる、神社の祭典とは別の行事でした。

オビシャとよばれるこの行事では、村の全戸が2軒1組となってそれぞれ1つの里芋の山を作り、当番の家に持ち寄っていました。このときの家の組み合わせは、「積み番仲間」とよばれる固定的なもので、これは現在でも里芋の供出組としてそのまま受け継がれています。この日は、里芋の山を持参した家から順に座敷の上座に座ることができたので、21日の午前0時になると、各戸の主が競い合って当番の家に集まったといえます。当時の村の戸数は31軒あり、計16個の里芋の山が並ぶようすは、「まるで農作物の共進会のようににぎやかだった」と当時を知る村の人は語ります。当番の家の前には、干イカやスルメなどを売る店も出るほどでした。

当番の家では、この日のために畳を替えたり、家を直すなどの普請をし、ごちそうや甘酒を用意してふるまうのが慣わしでした。当番は1年交代の全戸もちまわりなので、約30年に1回まわってきます。この30年とは、家にとってはおおよそ世代交代の周期でもあり、そのためオビシャの当番を務めることは、一世一代の大行事でした。茂名では、現在でも「当番を2回やらなければならない人は不幸だ」といわれます。これは、親が早く亡くなったり、跡取りがいない場合をさしているからです。

関東大震災のとき、当番を予定していた家が地震で倒壊してしまったので、これをきっかけに村の集会所で行うようになりました。第2次世界大戦中は一時中断されていましたが、終戦後すぐに復活し、昭和21年(1946)に集会所で行ったのが、全戸が参加したオビシャの最後となりました。以後は、積み番仲間で里芋を供出し、当番の家で一对だけ山を作って、十二所神社の供物として奉納する形に変え、現在に至っています。

里芋を用いたオビシャがいつ頃から始められたのかは、村に記録もなく、はっきりとはわかりませんが、古老の記憶をたどると、少なくとも幕末期にはこのような祭りがあったことが確認できます。また、十二所神社には、「祭神である国常立尊に12人の子どもがあったが、妃の乳の出が悪く、甘酒と里芋でこれを育てた」という言い伝えがあります。このため、茂名では「里芋を食べると風邪をひかない」といわれ、十二所神社の祭りにも、村で栽培した里芋を甘酒とともに供えるようになったといわれています。

オビシャは、一般的に「歩射」が起源といわれ、1年の吉凶を占う行事であるとされます。実際に占いの要素がみられなくても、春先に豊作や無病息災を願う予祝行事として位置づけられますが、茂名ではこれを畑作物である里芋で行っているところに特徴があります。また、1年間務めた当番を交代するトワタシ(当番渡し)の式が含まれていることも、この行事の重要な要素となっています。

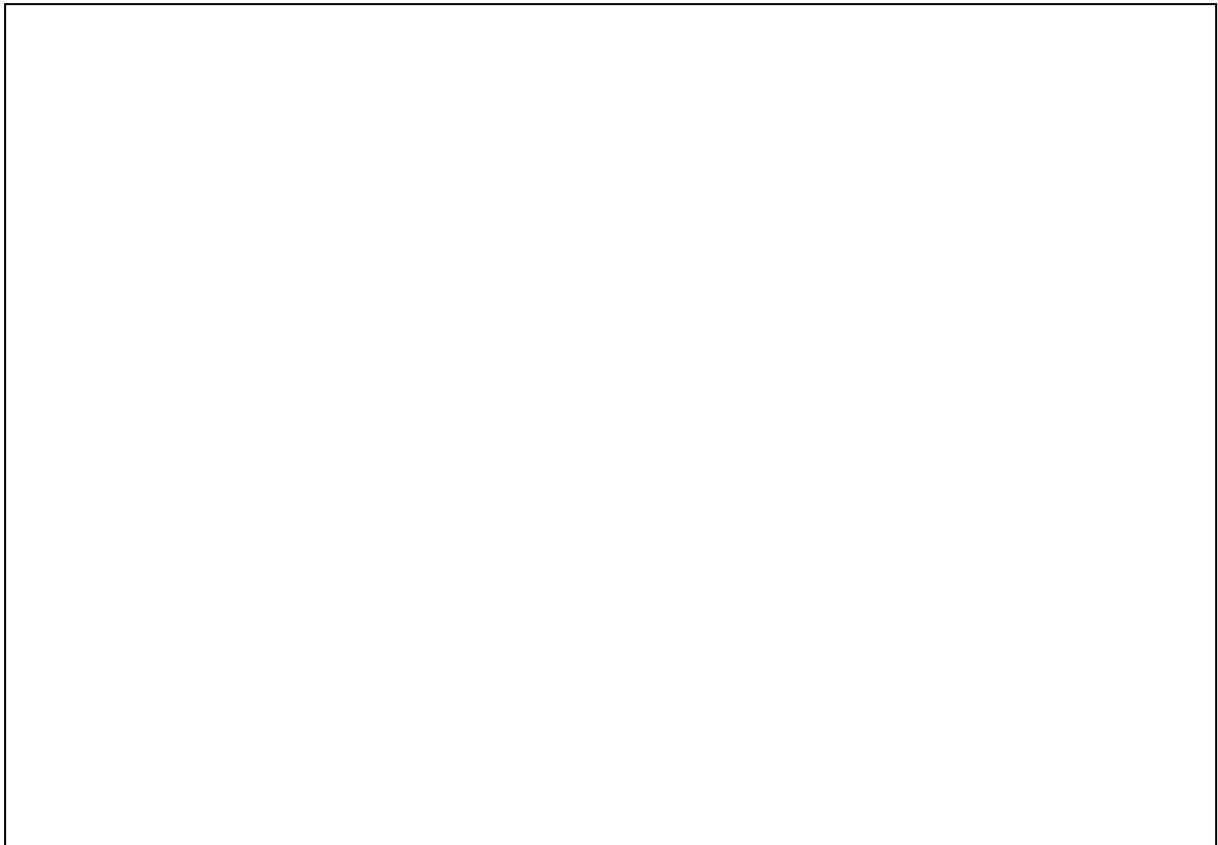
2. 里芋祭りの組織と役割

里芋祭りを継承するしくみは、当番と積み番仲間の組織にあります。いずれも、戦前のオビシャとよばれる行事だった頃から受け継がれているものです。

当番は、村の上のほうから家の並び順に、1年交代でまわってきます。現在では、当番の家に全戸主が集まることはなくなりましたが、供物である里芋の山を作る作業から、当番の交代式であるトワタシ、最終日の女たちのオコモリに至るまで、一連の行事の主要な会場となっています。戦前に比べて簡略化されたとはいえ、当番になると、祭りまでに畳を新しくしたり、家を改築したり、当日にはごちそうを用意しなければなりません。また、現在のような形で祭りが行われるようになってからは、当番の前年と翌年にも、里芋の山を作る作業に加わるようになってきているので、当番の年をはさんで前後1年ずつ、最低でも3年間は祭りに深く関わることになります。

いっぽう、かつて里芋の山を作るための組み合わせだった積み番仲間は、現在は里芋を供出する組として機能しています。積み番仲間は2軒1組で、「積み番」となった家がその年の里芋を用意します。積み番は一年交代で、もう片方の家は「相手番」とよばれます。現在は氏子が27戸なので、14組の積み番仲間が存在しますが、家の転出や廃絶によって多少の変動はあったものの、少なくともこの数十年来、家の組み合わせはほとんど変わっていません。積み番仲間がいつ、どのような経緯で形成されたのか、はっきりとはわかりませんが、本家・分家関係や、親戚関係、江戸時代の5人組とも一致せず、この行事だけに機能する特別な組み合わせであるといえます。

里芋祭りが、形を変えながらも今日まで受け継がれてきたのは、当番や積み番仲間といった、行事を支える人々の強固なつながりが保たれてきたからともいえます。そもそも、



第9図 積み番仲間の組み合わせと当番の順

茂名の村自体が、江戸時代の後半あたりからほとんど家数も変わっておらず、安定した状態で共同体が維持されています。一年でもっとも重要な行事である里芋祭りを支える村のしくみは、そのまま村そのものを支えるしくみともいえるのかもしれませんが。

3. 里芋祭りのいま

(1) 祭りの準備

供物となる里芋は、「茂名芋」とよばれるアカメの一種で、茂名の各戸で20～50株ほど栽培されています。茂名芋は硬いので積んでも崩れにくく、また大きな親芋の周りに子芋がたくさんつくことから、豊穰や子孫繁栄を象徴する縁起ものであるともいわれます。里芋を供出する積み番の年にはやや多めに作りますが、積み番でない年でも、種芋をとらなければならないので必ず作ります。

里芋祭りが終わった後、3月末から4月上旬頃に植えつけをし、10月から11月にかけて収穫して畑の一角に保存しておきます。積み番にあたる家では、祭りが近づくところを掘り出して、洗った後に軽く干し、2月19日の前日か当日の朝に蒸します。蒸しがあがった芋12個（予備として別に1個用意する）を、19日の夕方までに当番の家に届けます。芋を蒸したり届けたりするのは、主に女性の仕事です。

当番の家では、前年と翌年の当番、当番の相手番、親戚にあたる人など男衆が6～7人集まり、夕方7時ごろから里芋の山を作る作業を始めます。はじめに、芋を積む際に使う赤萩の茎の皮を小刀で剥いていきます。赤萩は、かつては村に生えているものを使っていましたが、入手が困難になったため、現在は城山公園のものを譲り受けて使っています。続いて、メシツギとよばれるワッパ状の容器を土台にして、芋を積んでいきます。現在のメシツギは、祭り専用の赤いプラスチック製のものが用意されていますが、戦前の頃には各家にあった木製のメシツギを使っていました。メシツギは、通常、中に鮭を入れたり、運動会のときに食事を運んだりするのにも使う道具でした。

芋は、山1つにつき90個を用います。これを1つずつ赤萩の茎で刺しながら、全体的にふっくらとした卵型の山になるように仕上げていきます。崩れないように、大小の芋を上手に組み合わせながら積まなければならないので、経験者が指導しながら慎重に作業が行われます。山ができると、一番上に花のついた梅の枝を3本ずつ刺します。一对の芋の山ができあがると、この日は当番の家の床の間に十二所神社の軸をかけ、重ね餅とのおし餅、腹合わせにした鯛2尾とともに、その前に供えます。作業が終わると、その場で簡単に飲食をして、この日はおひらきとなります。

こうした一連の作業は、すべて男衆によってなされます。女衆は、台所で来客のための食事等を準備するほかは、芋積みの作業が行



写真11 赤萩の茎の皮剥ぎ



写真12 芋積み

われる座敷に入ることも禁じられています。

(2) 祭典と当番の交代

芋積みの作業を終えた翌日の2月20日は、十二所神社の祭典の日です。午前中のうちに、昨晚当番の家で芋を積むのを手伝った人々が集まり、芋の山一対を神社まで運びます。芋の山は1つずつ籠に入れ、2人1組となって神社まで担いでいきます。このとき、当番の家に供えていた餅や鯛もいっしょに運びます。

昼前頃から祭典が始まり、終わるとその場で芋の山を崩して、氏子各家に分配します。のし餅も切り分けて同様に分配します。その後、拝殿にて、祭典に参加した氏子が御神酒とカラナマス（おからを使ったナマス）で直会をし、宮司と来賓、区の役員たちは、さらに場所を集会所に移して直会を続けます。

いっぽう、神社拝殿での直会の後、当番の家でも、前日から作業に携わった人びとによる直会が行われます。この直会が終わると、次の当番へと役を受け渡すトワタシという交代式が、氏子総代の立会いで行われます。氏子総代の前に、この年の当番と翌年の当番が向かい合って座り、酒器とカラナマスが用意されます。氏子総代がまず、今年の当番に向かって「当番の方ご苦労様でした」といい盃に酒を満たします。当番は「大役を無事すごしました。来年よろしく願います」といって、氏子総代から盃をうけてこれをほします。また氏子総代がナマスを箸でとって当番の手のひらに乗せ、当番はこれを食べます。続いて、次の当番も同様に盃を受け、「確かにお受けいたします」とやはり同様にナマスを食べて、トワタシの儀式が終了します。

この日の儀式で用意されるカラナマスは、館山市やその周辺地域で、祭りなどによく出される行事食です。オカラを酢で味付けし、ニンジンなどの野菜のほか、祝いごとの時には魚を入れます。茂名の里芋祭りでも、3日間を通じて必ず出さなければならない食べ物とされています。

(3) 女たちのオコモリ

祭典の翌日、2月21日は、朝のうちに神社の幟を降ろしたり、幟柱をはずす作業が行われます。こうした片付けが終わって、午後1時すぎから、当番の家では女たちだけで集まって、オコモリとよばれる会が開かれます。

里芋祭りでは、19日の芋積みから20日の祭典に至るまで、行事の表場面に女性は立ち入ることができません。その一方で、芋を蒸



写真13 十二所神社に里芋を運ぶ



写真14 トワタシ



写真15 女たちのオコモリ

したり、当番宅での直会の準備をしたり、各家で来客を招いてもてなしたり、祭の裏で忙しく立ち働かなければならないので、21日はそうした女たちの打ち上げのような意味もっています。オコモリは、祭りが現在のような形になる前にも、オビシャの翌日に行われてきました。

オコモリには、村の家のほとんどが参加し、当番は、煮しめ、カラナマス、赤飯といった料理や菓子などを用意してもてなします。会の半ば頃になると、数人が、この地に伝えられてきた「高砂」を、手踊りをまじえて披露します。茂名では、祝いごとの席では必ず高砂が最初に歌われるとといいます。その後、伊勢音頭も同様に披露され、歌や踊りで2時間ほどをにぎやかに過ごし、3日間続いた祭りを締めくくります。

4. 文化財としての里芋祭り

茂名の里芋祭りは、地域特有の生活文化を伝える祭りとして、昭和63年(1988)、館山市の無形民俗文化財に指定されました。その後、平成15年(2003)、千葉県は無形民俗文化財指定を経て、平成17年(2005)に国の重要無形民俗文化財の指定を受けました。

茂名の里芋祭りは、畑作物である里芋を用いて神への供え物を作るところに最大の特徴があります。祭りの形態そのものは、戦前オビシャとして当番の家で行われていたものが、戦後神社祭祀の一部として組み込まれるといったように、時代の変化に伴って部分的に変化していますが、里芋を供物として用いる点と、祭りを支える村の組織はかわらず受け継がれています。

日本の伝統的な生活文化は、これまで稲作のみを中心に考えられる傾向が強くありましたが、近年では、稲作を基盤としながらも、畑作、漁撈、狩猟、採集など、さまざまな生産活動を組み合わせて暮らしを成り立たせてきたことに、注目が集まっています。

里芋は、日本各地で古くから栽培されてきた代表的な畑作物のひとつですが、茂名の里芋も、近隣の地域に名の知れた村の特産品として、近年まで貴重な収入源となっていたほどでした(第3章を参照)。「里芋を食べると風邪をひかない」という言い伝えや、十二所神社の祭神にまつわる伝説などをみても、茂名にとっていかに里芋が大切な作物であったかをうかがうことができます。こうした背景のもとに続けられてきた里芋祭りは、日本における畑作文化と儀礼との関係を考える上で、貴重な事例であるといえます。

また、こうした儀礼を支える共同体のあり方にも注目がされています。かつての日本の社会は、生産基盤を同じくする村社会を軸として成り立っていましたが、時代とともに急速に変化しています。そうした流れのなかで、茂名では祭りを支える組織が変わることなく受け継がれ、基本的な祭の要素も継承されてきました。

里芋祭りが、いつ、どのような形で始められたのかは、記録もなく不明ですが、村の人々の記憶を頼りに、少なくとも150年以上受け継がれてきたこと自体が特筆すべきことといえるでしょう。祭りをはじめとする伝統行事は、時代とともに変化を余儀なくされるものであり、茂名の里芋祭りも例外ではありません。大切なのはその変化の過程をとらえ、ありのままを記録して伝えていくことにあるといえます。(山本志乃)

参考文献

- 萩原左人「安房の里芋祭りとその周辺」『千葉県立房総のむら年報』4 1990年
田村勇「茂名の里芋まつり再考」『千葉県立安房博物館研究紀要』1 1994年
千葉県教育委員会『千葉県祭り・行事調査報告書』2002年

第6章 里芋に関する儀礼について

はじめに

里芋はサトイモ科の栽培植物で、現在では日本列島の東北地方以南で広く栽培されていますが、もともと日本列島に自生していたものではありません。近年の研究により、サトイモの栽培起源地はインド東部周辺と推定されるようになりました。そこから日本列島へは、いくつかの野生種から多系統的に栽培植物化された品種が、中国の雲南地方から直接伝播したものと、東南アジアから台湾・琉球列島を介して伝播したものと、二つの伝播ルートがあったことが推定されています。

日本列島におけるサトイモの伝来時期を考古学的に遡って実証することは困難ですが、ヤマノイモとともに、サトイモが日本の古層の栽培植物の一つであったと想定されています。イモは古くはウモと発音されていたようで、『万葉集』には「宇毛（うも）」の表記がみられ、サトイモを指していると考えられています。また、『豊後国風土記』には、白鳥が餅になり、さらに芋草になり、冬であるのに花と葉が栄えた、と記されており、日本において古くから親しまれてきた栽培植物であることがわかります。

その後 16 世紀の初め頃にサツマイモが長崎にもたらされ、カライモ、トウイモ、天竺芋などと呼ばれました。ジャガイモはさらに少し遅れて日本に導入されましたので、江戸時代以前までは、イモは里芋をさす言葉でした。山野に自生するヤマイモに対して「里のイモ」という意味を含んだ呼称であると考えられます。江戸時代に栽培植物としてサトイモが広く栽培されていた様子は、江戸時代初期に編纂された『清良記』という書物に、冬季の種芋の保存法や土寄せなどの栽培技術をはじめ、13 種のサトイモの品種名が記載されていることからもうかがい知ることができます。サトイモの植時を判断するものに、イモザクラの伝承があります。小学校などの桜が咲いたらサトイモの種芋を貯蔵倉から出して植えるというような習俗で、サトイモ栽培が伝統的に行われてきたことを示しています。

さらに、サトイモやヤマイモと雑穀とを組み合わされた農耕文化が、水田稲作農耕が日本に渡来する以前に存在したことを想起させる習俗が各地にみられます。小稿では、日本各地で伝承されてきたサトイモに関する儀礼を概観しながら、サトイモを中心とした畑作文化の存立について考えてみたいと思います。

1. 日本のサトイモの分類と系譜

一般にサトイモの栽培品種群は、イモや葉身・葉柄の形態などに基づいて、えぐ芋群・土垂群・生薑芋群・石川早生群・黒軸群・蓮葉芋群・赤芽群・女芋群・筍芋群・唐芋群・八つ頭群の大きく 11 種の品種群に区分されます。サトイモは利用部位により、親芋用、小芋用、葉柄用など、用途ごとに分類されています。親芋用品種群には唐芋・八つ頭・赤芽・筍芋・生薑芋・女芋、子芋用品種にはえぐ芋・蓮葉芋・石川早生・土垂・黒軸・赤芽、葉柄用品種群には蓮芋があります。なかでも赤芽は親子兼用種で、サトイモのなかでも有用な品種であることがわかります。

サトイモには二種類の倍数体が確認されていて、染色体を三組持つ三倍体品種は概して小芋を利用するものが多く、二組の二倍体品種は親芋を利用するものが多いようです。日

本においては、三倍体系統の小芋利用型品種が圧倒的に多く栽培されています。

なお、山形県西田川郡，和歌山県日高郡，高知県吾川郡，山口県山口市ではサトイモを水田で栽培することが知られていますが，これらはタイモと総称されています。これらの地域のなかには，タイモ以外のサトイモをハタケイモと呼ぶ地域もあります。九州以南では，福岡県筑後川流域，鹿児島県薩摩地方，沖縄県国東郡金武町，八重山郡西表島などでタイモの栽培が盛んに行われています。薩摩地方ではミズイモ・ミゾイモ，沖縄県ではターンムと呼ばれています。タイモと呼ばれているのは，単一の品種を指しているのではなく，サトイモ科の品種の中で水分の多い土壌に耐えるさまざまな品種が含まれています。

また，近年の研究によると，沿岸部と山間部でのサトイモの品種分布を比較すると，山間部では多種類の品種を栽培する傾向があるのに対して，沿岸部では比較的少ない品種構成で栽培されているという傾向が見られることが明らかになってきました。

さらに，沿岸部でのサトイモ栽培の品種構成は，赤芽群が中心になっていることも明らかになってきました。館山市茂名でも栽培されている赤芽という品種は，芋から出る芽が赤や紫のアントシアン着色で赤いのが特徴で，晩生で，親芋も子芋も丸くて大きく，肉質はホクホクしていますが，貯蔵性はやや低く，暖地向けの品種です。現在では各地で栽培されており，とくに鹿児島県や千葉県が特産地となっています。しかし，山間部での赤芽群の栽培は寒冷な気候が種芋保存の障害となっており，栽培範囲が拡大したのは植え付け前に種芋が購入できるようになった近年からです。長い育成期間を要する晩生で，種芋の耐寒性が低いという温暖な気候に適した性質が，赤芽群の沿岸域での栽培と定着を進めたものと考えられます。以上のことから，サトイモのなかでも赤芽群は大変有用な品種であり，沿岸域を中心に栽培されてきたことがわかります。

2. サトイモをめぐる行事と祭祀

サトイモは東北地方以北の寒冷地を除いて広く各地で栽培されており，北関東や四国・九州では主食としても利用されてきましたが，正月や八月十五夜（芋名月）の儀礼食，冠婚葬祭などの料理に欠かせぬものとして重用されてきました。

とくに東北地方を除いて，正月に餅を供物や食物としないでサトイモを当てる地域が各地にみられるのは，基層食物としてのサトイモの重要性を示唆しています。群馬県ではサトイモのことを「蔭の俵」と呼び，九州ではケイモと呼ぶことなどから，サトイモが日常的な食料であると同時に，米を主食としなかった時代の食料や，凶作時の救荒食としても重視されていたことが考えられます。

日常食としてのサトイモは煮たり焼いたりして食べることが多いのですが，蒸したり煮たものをさらに練り上げ，小豆餡をまぶして食べる習俗などもあり，サトイモが焼畑でアズキなどの他の雑穀や根菜類と一緒に栽培されてきたこととの関連を想起させます。焼畑との関連でいえば，赤芽群が儀礼食の食材として重用されてきたのも，焼畑耕作により山野を焼き尽くす赤い火と赤い芽との重層性を指摘することもできるかもしれません。

全国的に知られているサトイモに関する儀礼には，芋正月と芋名月があります。

芋正月は，餅なし正月における代替物として，特にサトイモやヤマイモを儀礼上重視することに由来しますが，うどんやそばを代替物とする場合も多いことから，芋正月が餅なし正月と同義とは限りません。正月の儀礼食にイモを用いることを，家に伝わる習わしと

いうことで、イモ家例やイモ縁起という場合があります。また、埼玉県北川辺村の事例のように、芋正月が伝えられている地域では、餅を正月の供物や食物に用いると火事などの不幸にみまわれるという伝承をともなう場合があります。

芋名月は、陰暦八月十五日の十五夜の異称で、陰暦九月十三日の豆正月（栗正月）に対応した呼称です。仲秋の名月にサトイモを供え、この日にその年の初収穫のサトイモを食べる行事として広く知られています。芋名月の供え物については禁忌もみられ、千葉県では長男や主人だけが食べるという習慣がありました。一般的にはススキや団子も供えますが、特にサトイモが重視されています。サトイモの栽培は、概して関東地方北部から東北地方南部を栽培の北限としています。イモメイゲツやイモアゲなどの行事名称は、大阪府や奈良県などの関西地方に濃密に分布しており、サトイモの栽培範囲の外縁部にいくほど希薄になります。サトイモが正月の儀礼食の一つとなっている東北地方では、十三夜を芋名月、十五夜を豆名月と呼ぶ地域がみられ、収穫時期の差異に起因するとみられる呼称のずれもみられます。東北地方で秋に催される河原での芋煮会はサトイモの収穫儀礼の名残を示すものとして位置づけられます。

十五夜の行事は、太平洋諸地域の主要食物であったタロイモ系のイモの収穫儀礼が水稻栽培の展開にともなって水稻儀礼と結びつき、対置されていったものと考えられます。鳥取県伯耆地方のように、この日を芋神様の祭、サトイモの年取りとってサトイモを掘り始める日とする地域もみられます。サトイモが儀礼作物として重視されている九州地方の十五夜行事では、年占としての綱引きや相撲、八月踊りなどの諸要素が結びついています。

また、日本各地には、サトイモを主要な神饌とするなど、サトイモに関する儀礼や祭祀がみられます。東日本では千葉県に濃密に分布しており、館山市茂名の里芋祭をはじめとして、船橋市滝神社の芋祭り、銚子市八木町や海上郡飯岡町・海上町の芋念仏が知られています。西日本では、岐阜県武儀郡生櫛・住吉神社の芋打ち祭り、奈良県磯城郡一帯で行われている芋座祭り、滋賀県蒲生郡日野町中山の芋競べ祭り、滋賀県野洲郡野洲町三上神社のズイキ祭り、京都府上教区・北野神社のズイキ祭り、山口県厚狭郡・吉部八幡の芋煮神事などが知られています。ズイキ祭りはサトイモのズイキ（葉柄）とめでたい供え物を祭るという瑞饋という言葉とをかけたもので、神輿をズイキなどで飾り立てます。南島地域の霜月祭である奄美大島の冬折目（フユウンメ）や沖縄県国頭地方の芋折目（ウムウイミ）は、神であるノロたちが芋を食べて豊作を祝福する祭りで、霜月祭の古層にサトイモやヤマイモの収穫儀礼が連なっていると考えられます。

このようにサトイモに関する儀礼は、サトイモの栽培地域にのなかでも近畿地方を中心にして各地に散在しており、関東地方でサトイモに関する儀礼が多くみられる千葉県の位置づけは興味深い存在です。

3. サトイモの儀礼が示すもの ―雑穀畑作文化の再構築

農耕儀礼の研究は、当該地域における作物の年周期の体系的な位置づけとともに、それらが当該地域の社会や経済や文化にどのように関わっているかをまず明らかにしなければなりません。稲作のように一元的な展開が可能な作物と異なり、畑で栽培される作物は多様であるばかりでなく、それぞれの栽培期間が比較的短く、それらが重層的に栽培されることから、それぞれの栽培過程で儀礼を行う機会が統合されたり、儀礼としての意識が希薄

化していったことが予測されます。

概して、畑の作物がその栽培過程に儀礼的要素が表出するのは、新年の一連の予祝行事と秋の収穫祭で、後者は秋から暮れにかけてのダイコンやサトイモの収穫が稲の収穫儀礼と複合した形であられることが多くみられます。そうしたなかで先述した芋名月はサトイモの儀礼として独立性を有しており、畑作におけるサトイモの特殊性を示していることに留意しなければなりません。

ところが、サトイモを含む畑作の儀礼は、家族を単位として行われるもので、地域社会全体が共時的に行っていたとしても、地域社会の構成員が同一空間に集って、共通の儀礼を行うというような展開には元々なりにくい性質を内包していました。稲作一元論を中心に展開してきた日本民俗学は、畑作が有していたこうした自由度や柔軟さを評価するのではなく捨象する方向で研究をすすめてきました。そのために生業研究においても、儀礼研究においても、稲作の栽培過程を基準とした分析をつづけてきました

その過程で坪井洋文は稲作文化と畑作文化との歴史的葛藤関係について、餅なし正月の起源を求める方法を試みましたが、その伝承分布をみると餅なし正月は平野部の稲作優先地帯に多く分布しており、餅を禁忌の対象にすること自体が先行した稲作の存在を前提にしたものであることが確認されました。そして、その後の研究は稲作文化と畑作文化との葛藤関係よりもむしろ、予祝的儀礼である正月の有する複合的性格を明瞭にしていくことになりました。餅の存在によって一元的に捉えられがちな正月の儀礼は、サトイモやソバなどを儀礼食として用いる複合的な性格を持っていることが解き明かされました。

おわりに

サトイモに関する儀礼について述べてきましたが、サトイモを中心とした畑作文化をどのように捉えるかという視点についても述べておきたいと思います。

これまでの農耕儀礼研究は、稲作一元論に対する視点として、稲作文化と畑作文化との葛藤関係や競合関係に対する視点を強調してきました。しかし、両者を葛藤関係や競合関係という視点で捉えるよりは、複合的存在として捉えるほうが妥当であることがわかってきました。その理由の一つは、サトイモとイネの類似性についてです。日本では、サトイモは通常、畑で栽培されていますが、サトイモの原種と考えられているタロイモ類の多くは、畑でも水田でも栽培が可能です。このことは、農耕作物のなかで、栽培に際して水陸両用に転換が可能であるという品種がイネだけではないということを示しています。イモとイネは共に貯蔵性が高く、粘り気を有する食感も共通しており、定住生活において基幹的食物として位置づけることが可能です。芋正月や芋の年取りの儀礼はイモ霊の存在を想定したもので、稲の儀礼に通低しています。もう一つの理由は、餅そのものが持つ複合性です。餅は一般には糯米を蒸して搗いたものと考えられていますが、モチという名称が付いた食物には、糯米以外を材料としたものや製法も異なるものがあり、実に多様です。特に材料に注目すると、アワ・キビ・小麦・ヒエ・ソバなどの雑穀を素材にしたもの、トチ・ナラ・カシ・栗などの木の実やヨモギなどの草を加えたもの、サトイモやサツマイモの餅、クズやワラビ根から採った澱粉で作る餅があり、米よりもむしろ畑作物や山林での採取物の割合が高いのです。このように稲作一元論の象徴的な存在であった餅自体が、稲作文化と畑作文化との複合的存在であることを示しているのです。

(小島孝夫)

「茂名の歳時記～里芋祭り～」 撮影の記録

■平成 17 年 (2005)

- 2月19日** **里芋祭り(十二所神社のマチ, ビシヤ)** 同行者: 田村勇・榎美香・杉江敬
- 午前 ○石井克己氏宅: 積み番宅。里芋を蒸かす
○石井武蔵氏宅: 積み番から, 当番宅に, 里芋が届けられる
- 午後 ○茂名の風景
- 夕方 ○石井武蔵氏宅: 当番(平成17年当番)宅で, 里芋の神饌づくり, 完成後の共同飲食
- 2月20日** **里芋祭り(十二所神社のマチ, ビシヤ)** 同行者: 田村勇・榎美香・杉江敬
- 午前 ○石井武蔵氏宅～十二所神社: 平成17年当番宅より里芋の神饌出発。神社への行列
○十二所神社: 祭典。里芋の氏子への配付。祭典に参加した氏子による直会。インタビュー(氏子女性1名)
- 午後 ○区民館: 宮司と来賓, 区の役員による直会
○石井武蔵氏宅: 当番宅で, 前日から作業に携わった人びとによる直会
○ゴウクラ跡: ゴウクラについての解説(田村勇)
- 2月21日** **里芋祭り(女のオビシヤ)** 同行者: 田村勇・山本志乃・杉江敬
- 午前 ○畑: 砂地に埋めて貯蔵していた里芋の掘り出し(石井ふみ子氏)
○石井克己氏宅: 里芋を洗う
- 午後 ○石井武蔵氏宅: 女たちのオコモリ。インタビュー(女性4名)
○石井武蔵氏宅: 当番のインタビュー(石井武蔵氏・千加子氏)
- 4月15日** **茂名芋の植え付け**
- 畑: 来年の里芋祭りのための芋の植え付け(石井ふみ子氏)
- 7月17日** **浅間様のお籠もり** 同行者: 田村勇
- 十二所神社: 夏なぎ(草刈)
○浅間神社: 夏なぎ(草刈)。浅間様にお酒を供える
○区民館: 飲食。ホウチョウを茹でる(再現)※ホウチョウづくり(田村勇)
○十二所神社: ホウチョウを供える(再現 石井俊一氏)
○畑: 里芋の種類の説明
- 8月13日** **お盆** 同行者: 田村勇
- 墓地: 里芋の葉に載せ, ナスとウリを供える。チョウチンカケをつくる
○矢田勇氏宅: 新盆の家で, 盆棚。インタビュー(矢田勇氏の母・矢田勇氏)。玄関先のトウロウ。
○石井克己氏宅: 盆棚。インタビュー(石井ふみ子氏)。迎え火
○矢田勇氏宅～墓地: 迎え火。キリコと提灯を手に墓地へ
○墓地: 提灯を掛け, お墓に線香を上げる
○矢田勇氏宅: 新盆の家に, 親戚が集まって念仏を唱える。飲食
- 11月25日** **里芋収穫**
- 畑: 茂名芋の収穫。砂地に穴を掘り, 2月までに貯蔵するために里芋を埋める(石井ふみ子氏)
○斜面の穴: 石井武蔵氏夫人千加子氏が, 茂名芋を穴に入れ埋める
- 12月21日** **ハギの刈り取り** 同行者: 杉江敬
- 城山公園: ハギの刈り取り。氏子総代石井武蔵氏と平成18年当番宅の石井ふみ子氏が, ハギを受け取る
○石井克己氏宅: 当番宅の日陰で, ハギを保管する
- 12月30日** **年末行事**
- 石井俊一氏宅: 茂名区長宅で, お供え餅づくり。注連縄づくり・サンダワラづくり・注連縄, 門松を飾る(以上, 石井俊一氏再現)
○石井克己氏宅: 注連縄を家の各所に飾る。門松を飾る
○十二所神社: 平成18年の当番(石井克己氏)が注連縄と門松を飾る(石井克己氏)
- 平成 18 年 (2006)
- 1月3日** **正月行事** 同行者: 田邊由美子(県教育庁教育振興部文化財課)
- 十二所神社: 初詣で神前の餅と, 持ってきた餅を取り替える氏子たち
○石井武蔵氏宅: 男性(武蔵氏)が雑煮をつくり, 家の各所に雑煮を供える。家族, 親戚で雑煮を食べる。
○石井克己氏宅: 女性(ふみ子氏)が雑煮をつくり, 家の各所に雑煮を供える。約30年前の里芋祭りの写真撮影

参考文献～さらに理解を深めるために。

【茂名の里芋祭について】

- 萩原左人「安房の里芋祭りとその周辺」『千葉県立房総のむら年報』4 1990年
- 山本志乃「イモを繋いで生きる－茂名・里芋祭継承の諸要素」『館山市立博物館年報』39 1992年
- 田村勇「茂名の里芋まつり再考」『千葉県立安房博物館研究紀要』1 1994年
- 山本志乃「館山市茂名の里芋祭り」『千葉県祭り・行事調査報告書』千葉県教育委員会 2002年
- 文化庁文化財部「新指定の文化財（民俗文化財・記念物）」『月刊文化財』498 第一法規株式会社 2005年

【里芋に関する儀礼について】

- 坪井洋文『イモと日本人－民俗文化論の課題－』未来社、1979年
 - 芳賀 登・石井寛子監修『米・麦・雑穀・豆』[全集日本の食文化 第3巻] 雄山閣出版、1998年
 - 安室 知『餅と日本人』雄山閣出版、1999年
- 吉田集而・堀田満・印東道子編『イモとヒト－人類の生存を支えた根菜農耕－』平凡社、2003年

DVD「茂名の歳時記～里芋祭り～」解説書

平成18年3月29日発行

発行 千葉県伝統文化伝承事業実行委員会
(事務局：館山市教育委員会生涯学習課)

〒294-8601 千葉県館山市北条1145-1

編集 茂名の里芋祭り映像記録作成委員会



茂名の歳時記 ～里芋祭り～

千葉県伝統文化伝承事業実行委員会